

聞き取り調査

西南聖書学院 第1期卒業生 大塚九三子氏

「道は開かれた」

— 大切にしたい人間的なふれあい —

実施日時：2009年9月17日

実施場所：大分キリスト教会（大分市城崎町2丁目6-22）

語り手：大塚九三子氏

大塚九三子氏と西南聖書学院の略歴

- | | |
|----------------|--------------------------------------|
| 1961(昭和36)年3月 | 大分県佐伯市内小学校教諭退職 |
| 同 4月 | 西南聖書学院開設（修学年限3年、入学定員20人、収容定員60人）、同入学 |
| 1962(昭和37)年10月 | 西南聖書学院が福岡県知事より各種学校として認可を受ける |
| 1964(昭和39)年4月 | 西南聖書学院卒業（第1回） |
| 1968(昭和43)年5月 | 米国サウスウエスタン・バプテスト神学校卒業 |
| 1969(昭和44)年4月 | 西南学院バプテスト教会教育主事 |
| 1975(昭和50)年3月 | 西南聖書学院は神学部とのカリキュラムの一本化に伴い廃止される |
| 1976(昭和51)年3月 | 本学文学部外国語学科英語専攻卒業 |
| 1978(昭和53)年3月 | 本学大学院文学研究科英文学専攻修了（第1回） |
| 1983(昭和58)年10月 | 本学非常勤講師に就任、その後、神学部特任講師など通算12年勤務 |

◆教会は私の原点

地元（大分）の大学に入学し、英語の勉強のため英会話の講師だったウォーカー先生¹の家で開かれたバイブルクラ

スに行き始めました。そして誘われていったのが大分キリスト教会です。小さな教会でしたが、家庭的で温かい雰囲気でした。そこで初めて人と話すことができるようになりました。誰も信じないで

1 William L. Walker (1923-2002) 1948年より1988年まで大分、福岡、高知で伝道を行う。（以下、脚注は編者）

しょうけどね(笑)。同窓会で「大塚がよく教師になったな」と小学校の担任の先生から言われるほど、私は人見知りや激しく、大学生になっても人の前でしゃべれない、常に人の前には出たくない、出てもしゃべりたくない、そんな性格でした。でも初めて教会に足を踏み入れたとき、「いらっしゃい」と受け入れられて、自分の居場所を見つけたのです。「ああ、私はここに居ていいんだ、ここではみんなが私を一人の人間として受け入れてくれるんだ」ということが不思議に分かりました。そういう意味で、教会は私の原点なのです。教会で初めて自分自身のことや体験を話せるようになりました。そのうちに、英語よりも聖書のほうに興味を湧き、二十歳になったときバプテスマ(洗礼)を受けました。

◆ “なぜ” を教えるために

大学の2年課程を修了して小学校の教師になりましたが、私が教師をしていた1960年前後は、教育界が道德教育を導入しようということで、大変混乱していたときでした。昔の道德というか、修身は、「みんな仲良くしましょう。両親を敬いましょう」と、ただ教えればいいわけですけれども、「なぜ仲良くしなければいけないか」は教えられないのです。ただ仲良くする方が気持ちがよくて、みんなが喜ぶとか、そういう理由でした。クリスチャンの私としては、神様の前ではみんな平等、男も女も関係ない、困っている人も裕福な人もみんな平等、だから人間は仲良くしなければならない、と思っていたわけです。この「なぜ」を教えられないのが公教育で、「なぜ」を堂々と教える教育をしたいと思ったんですね。それならばキリスト教教育を学ば



▲「教会は私の原点」と語る大塚さん

なければならぬと思いました。ウォーカー先生に相談したところ、ちょうどそのころ、広く次の世代の働き手を育てることを目的とした西南聖書学院という学校ができたが、そこで少し勉強したらどうか、と言われました。しかしそれまで続けてきた教師の仕事辞めて、それだけの価値があるかどうか分かりませんでした。そんなとき事故が起きました。校庭で遊んでいた女の子の上に遊具が壊れて落ち、その子はその下敷きになってしまったのです。たまたまその光景を目の当たりにして「ああ、私は何をしていたんだろう。こういう子どもたちがたくさんいるのに、イエス様のことを伝えられないでいた。イエス様のことを伝えるチャンスがないままに、あの子が息絶えていく」と…。そのころ読んだ聖書が不思議なことに頭をよぎりました。旧約聖書の「哀歌」にある聖句です。

夜、初更に起きて叫べ。

主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。

町のかどで、飢えて

息も絶えようとす幼な子の命のために、
主にむかって両手をあげよ。

(哀歌 2章19節 口語訳)

私の目の前で亡くなった女の子も、永遠の命やイエス様の愛など何も知らされないままに「飢えて」息絶えたのです。この言葉とこの出来事がある、それまで漠然と公教育ではなくて宗教教育の場で働くことができないだろうかという思いが、具体的に私の心を捉えました。キリスト教でいう召命、献身がこの聖句で確信できたと思いました。そして西南聖書学院に進む決心をしました。27歳の時の話です。

◆干隈の森

西南聖書学院では、聖書釈義、キリスト教史、説教、牧会学、伝道学、本当にいろいろな授業があって楽しく、干隈キャンパスでの学生生活を楽しんでいました。今は干隈を知らない人のほうが多くなって寂しい限りです。私は大学の一麦寮²で生活していましたので、近くの烏飼教会にもお邪魔していました。寮から神学部のある干隈まで遠くて通うのは大変でした。烏飼から西新まで歩いて行って、昔ですからバスも本数がなくて不便な中で干隈まで通ったんですよ。でも、それも非常にゆったりとした時間と空間があって、雰囲気も森の中にいるようでした。いっさいの外界のわずらわしさやそういう雑音がない中で歩く道がとても貴重な時間でした。静かで自然は豊かさにあふれていました。チャベルがまたよかったですね。山の家³もよかったです

し、授業がないときなどは山の家³の庭に行ってくつろいでいました。

授業もほとんど神学部の学生といっしょでしたけど、彼らには、ギリシャ語、ヘブライ語、外書講読がありました。聖書学院は語学がありませんでしたから原語の聖書を読むことができませんでした。専門用語で言えば、いわゆる原典釈義。新約ならギリシャ語、旧約ならヘブライ語で読むという授業が受けられないわけです。学部学生は原語であたることができるのがうらやましかったですね。受けられない語学の授業は聴講しました。いわゆるモグリという形でしたけど（笑）。聴講したおかげで、ギリシャ語原典を少しでもかじることができましたが、勉強しても単位にならないのが残念でした。語学というのはとても大切だと思います。聖書を読むときに原語の知識があるのとないのでは全然違いますからね。かと言ってそういう知識がなければ読めないというわけではありませんが、あるに越したことはないと思います。

◆卒業旅行

当時、女子学生は3人で、北九州に卒業旅行に行きました。今でいうインターシップとまでは行かないけれども、教会を訪問して泊めていただいたり、実際に集会にも参加して、お手伝いもしました。関谷先生⁴も同行してくださって、そういう実地を見たり触れ合う機会を

2 もともと短大の女子寮として1949年に烏飼の地に建築され、その後、大学の厚生施設となったが、老朽化のため1987年3月に廃寮となった。

3 1952年に建築された木造平屋の修養会館で、1982年まで使用された。暖炉の上には建学の精神が刻まれた木枠と锚型の薪棚が印象深く、現在は西南学院小学校に飾られている。

4 関谷定夫氏は1952年に西南学院大学に就任。講師、助教授を経て1969年教授。1996年に退職。専門は聖書考古学。本学名誉教授。



▲旧干隈キャンパスの神学部校舎

作っていただきました。

干隈キャンパス全体でコミュニティという感じで、チャペルもいっしょでした。神学部のイベントの寮祭や神学部祭、ピクニックといった行事は、分け隔てなく参加させていただいたんですよ。西南聖書学院が各種学校だからというような懸念はありませんでした。卒業式も神学部もいっしょでしたし、今思うとほんとうにありがたい時間を3年間過ごさせていただきました。

◆E. B. ドージャー先生の思い出

思い出深いのは、E. B. ドージャー先生⁵の伝道学です。日本語が堪能で、レポートを提出したら全部それを読み、誤字を直して(笑)、日本語でコメントを書いていただきました。日本人の先生で

も提出しただけで終わる方もいる中、丁寧に全員のレポートにコメントを書く、そういう意味で人間味を感じる方でしたし、教科よりも先生の人格に惹かれましたね。お母様のドージャー夫人⁶もご存命で、一度チャペルでの話を聞いて、非常に感動したのを覚えています。夫人の生き方、学生に対する熱意や学生へ語りをする意欲、姿勢は素晴らしいものでした。私も後でご挨拶に行ったのですが、学生一人ひとりにきちんと対応してくださって、そういう人間味のある学生生活が西南の宝物だったと思うんですよ。後に西南で教えるようになったときに、やはり人間味のある教師でありたいということ強く思いました。E. B. ドージャー先生やC. K. ドージャー夫人を見て、感じて、心に響くものを受けましたから、それをお返ししているに過ぎなかったと思います。本当に素晴らしい人々にめぐり合えたと思います。

◆ウィットに富んだギャロット先生

ギャロット先生⁷は立派な方でしたね。先生も日本語が堪能で、伝道学やキリスト教教理を習いました。とにかく日本語が巧みで、ウィットに富んでいて、すぐに言葉を返すんですね。今でも忘れられないのですが、神学部では学期はじめの開講講演があり、その年の講師は関

5 Edwin Burke Dozier (1908-1969), 西南学院創立者C. K. ドージャー氏の長男。1933年、西南学院高等学部に教授として就任。1933年西南学院理事、1965年第9代院長などを務める。

6 Maude Burke Dozier (1881-1972), 夫であるC. K. ドージャー氏とともに宣教師として日本に渡り、1940年に西南保母学院開設。生涯を通じて女子教育に携わった。1961年、長年にわたる教育者、宗教者としての功績により西日本文化賞が贈られる。

7 William Maxfield Garrott (1910-1974), 1936年高等学部教授に就任。第5代・第11代院長、初代学長、第10代理事長などを歴任。このほか西南女学院においても院長・学長を務める。

谷先生になっていました。ところが講演時間が過ぎても現れないのです。その時、司会をしておられたギャロット先生が「関谷先生がまだのようですが、どうも発掘しに行かなければならないようですね」とおっしゃったのです。つまり埋もれているから、なかなか出てくるまでに時間がかかる。それを関谷先生の専門である考古学になぞらえて巧みに言われたのです。会場は大笑いでした。すべてを見事な日本語で雰囲気盛り上げ、場を和ませます。そんな方でした。

◆料理が上手なキャンベル先生

私の教会籍は西南学院教会でしたが、寮の近くの鳥飼教会にも行きました。そこにキャンベル先生⁸が来ていらっしゃいました。先生は、厳しいけれど人情味のある方で、料理が上手というのが一番の魅力でした。料理を作ることで、みんなをもてなしてくださいました。「the shortest way is stomach」だったのでしょうか。「心をつかもうと思ったら、まず食べること（胃袋）から」（笑）という言葉を見せてくれたのは先生じゃなかったのでしょうか。先生の教会学校への情熱、教会のいろんな活動に対する積極性はすばらしいものでした。絶えず勉強しておられましたし、新しいことをどんどん紹介して、決して日本の現状を否定したり、見下すようなことはおっしゃいませんでした。そんな情熱や積極性をどこで学んできたかという、米国テキサス州のサウスウエスタン・バプテスト神学校だっ

たわけですが、そこではこういうことも学べるのかと目が開かれました。よくよく聞いてみると神学校の中に神学部と宗教教育学部、宗教音楽学部があるということです。3つの学部を持つ神学校があるなんて驚きでした。私が勉強するのはそこだと思いました。

◆道は開かれた

聖書学院には、卒業後、みなさん牧師になろうという人が集まっていました。ですが女性の仕事、職場がないんです。私自身は牧師になりたいという意味は全くなく、そんな器じゃないと思っていました。宣教師にも相談しましたが、道は必ず開かれるというのが、彼らの姿勢ですから、私の場合もそういうものじゃないかなと思っていました。将来、どんな風に進もうかということが、全く分からないままでした。でも教育はやりたいなあと感じていましたから、キリスト教教育学という科目を見つけてうれしかったですね。ただ在学中、4単位しかなくてちょっとがっかりしました。しかし実際、聖書学院に行ってみると、不思議に道は開かれるんですよ（笑）。卒業後、キャンベル先生のアシスタントとして働くことになりましたが、学びたいという願いがかない、キャンベル先生の母校であるサウスウエスタン神学校の宗教教育学部の大学院に留学することになったのです。

余談ですが、その後、シート先生⁹のアシスタントとしても仕事をしました

8 Vera L. Campbell-Gualtt (1921-)、1952年から西南学院大学に就任。主に神学部と短大で教鞭をとる。本学名誉教授。

9 Leroy K. Seat (1938-)、1968年助教授として本学に就任。その後、第16代院長、第16代理事長を務める。本学名誉教授。

けれども、先生はどんなにクラスの人数が増えても一人ひとりの学生を追い求めた方でした。一人ひとりの声を聞いて、応えて、必要があれば訪問して、電話をかけて、呼び出して…。本当にどれだけ多くの学生が、先生によって救われるとか、道が正されたかと思います。

「シート先生に出会って生き直すことができた」と、本当に多くの学生が言うのです。私自身、大学で教えた時、そういう教師でありたいと思っていましたが、なにせクラスの人数のマンモス化はどうにもなりませんでしたね。

◆時代の趨勢

聖書学院で学んで一番良かったのは、道が開かれたということです。あのまま公教育に不満を持ったまま教師を続けても、ストレスが溜り、何もできない自分に嫌気が差すのが目に見えていたでしょう。本当に思い切って一歩が踏み出せた。キリスト教教育に目が向けられた。これは神様の導きとしか言いようがないですね。神様の言葉やイエス様の愛を語りたとか、本当の愛や平和とはどういうものか、堂々と価値観を持って語られる場に行きたいという、それだけの願いで相談したところ、道が開かれて行ったわけですから。

聖書学院が消失したのは、まさに時代の趨勢だったでしょう。大学進学率も高くなった時代で牧師は教会のリーダーの立場になるわけです。そういう人たちは学識というより、絶えず学ぶ姿勢を持っていないかとは思いますが。学歴社会は好きではないですけども、みなさんが大学に行くようになって、牧師もそれに対抗していただくの資質がないとやっていけないでしょう。それだけ教師

も学生もレベルは上がってきたし、研究分野も変わってきているので、仕方がなかったことでしょうか。なくなって残念ですが、これは時代の趨勢でしょう。必要なときに、必要な学校があって、その役割を終えたということだと思います。

◆人格的なコミュニケーション

現在の学生にアドバイスをと言われたら、教師とのコミュニケーションを求める学生であってほしいと言いたいですね。教師の人格に触れる、そんな期待を持ってほしいと思います。私が後に講師として教壇に立った時も、今の大学は学問の場と割り切っている学生もたくさんいました。私が何か言うと、「先生と何の関係があるんですか」と反発を受けたこともあります。だから余計に教師との人格的なコミュニケーションをとることが大事なんじゃないでしょうか。ただ知識だけを学び、人間的な交わりのない学生生活というのは寂しいですよ。学生時代だからそういう多くの人と触れ合う機会とか、人格的な交流が一番与えられていると思います。

それから今後の西南に期待したいことは、人間関係というかコミュニケーションとか、端的にいうと教師と学生の交わりが豊かな大学であってほしいと思います。単位をとって終わり、じゃなくて生涯つきあえる師に出会う。生涯一緒に研究をする友と出会う。そんな学問の場であってほしいですね。ただ学歴や資格を与えるとか、英語に強い学生を育てるとのことじゃなくて、西南の理想が実現できる学校であつたらいいと思います。見かけだけ立派な大学にならないようにしてほしい。それだけを思います。

(広報・連携課)